

吉岡洋とゲストによる
哲学とアートのための 12 の対話 2024

土曜の放課後

第4回

島藺進 × 吉岡洋

第4回 〈神さま〉について考えてみる

島蘭 進 × 吉岡 洋 （進行 大西宏志）

大西 皆さんこんにちは。ようこそお越しくださいました。「吉岡洋とゲストによる哲学とアートのための12の対話」。「2024土曜の放課後」をただいまより始めたいと思います。こちらのイベントというか催しなんですけれども、昨年度12回、吉岡洋先生とそして室井尚先生による対話というのを京都芸術センターを中心に開催する予定でした。

実はその室井尚先生は今年の3月に残念ながら亡くなられてしまっていて、対話と言っても、遺されたご本に書かれてある言葉とか映像とか、そういうものをもとにして、吉岡先生がお話をしてくださるというような催しになりました。今年は新たに毎回ゲストの方をお呼びして、テーマに沿って雑談をしていただくというような趣旨で開催しております。

雑談と言いますのは、どうしてもレクチャーになると、偉い先生がまとまった話を順序よくしていただいて、賢くなったような気がして帰るわけなんですけれども、もうちょっと皆さんからも刺激をもらうような形で、先生方お二人も互いに刺激し合うような形で、リラックスした雰囲気でお話をしていきたいと思います。というような趣旨で今年度は進めております。

今日で第4回目になるんですけれども、お二人目のゲストとして宗教学の島蘭進先生にお越しいただいております。どのような雑談が聞けるか、ぜひ楽しみにしてください。では吉岡先生からよろしく願いいたします。

吉岡 こんにちは。お集まりいただきありがとうございます。今紹介していただいたように、これは今年12回のうち5回はゲストを呼んで、ここで対談をして、皆さんともお話しするというような会になります。

今日がその2回目で、第1回目は佐伯啓思さんに来ていただいて、日本に

ついて雑談をすることを試みました。普通、「日本」なんていうとちょっと重いテーマというか、ちょっと身構えてしまうようなテーマを、あえてリラックスしてしゃべってみようという趣旨でした。その中でも、佐伯さんの方から宗教に関するお話が、結構二人の対談の中にたくさん出てきたんですね。

今回は宗教に関わる主題、超越者、神様といった、これもまた普通あまり雑談にはなりにくいテーマを扱います。そうしたテーマは、普通はちょっと襟を正して聞かなきゃいけないみたいなどころがありますね。さらには宗教というと、現代人にとっては縁遠いという感覚と同時に、それについて気楽にしゃべるのがタブーみたいなどころがあったり、人によっては宗教とはちょっと「やばい」——すごいという意味じゃなくて、危ないという意味での「やばい」ですが——ものじゃないか、みたいな印象を受ける人もいると思うんですね。

なので、今回は宗教について、なるべくリラックスした雰囲気でお話できればと思います。島菌先生は、書かれたものは前から知っていたんですけども、直にお会いしてこういうお話をするのは考えてみると初めてなんです。もっともお顔を見るのは初めてではなくて、島菌先生は日本学術会議哲学委員会の連携会員をされているので、会議ではよくお目にかかっているのです。会議といっても、僕が学術会議に入った時ちょうどコロナになったので、ずっとオンラインの会議でした。ですので今回は直にお会いできるのを楽しみにしておりました。

進め方としてはまず、内容盛りだくさんのスライドを用意していただいたので、最初に島菌先生にスライドを使ってお話ししていただきます。スライドはお手元にあるプリントアウトした資料と内容は同じですので、モニタの画面が後ろの方だとちょっと見えにくいかもしれませんが、その場合は資料を参考にしながら聞いてください。

大体30分前後をお話いただいて、その後僕と少しやりとりをした後、休憩を挟んで皆さんからも質問とかご意見をいただければと思います。よろしくお願ひします。

島菌 いろいろ発見がございますが、そもそも京都芸術大学と京都市立芸術

大学の区別がついてなくて(吉岡 それはまずいです(笑))。皆さん区別がついてるんですか。すごいなあ。話題にはなっていたけど、東京の人は分らない。なので、今日はいろいろな発見があるんじゃないかと楽しみにしております。

私は宗教学というのをやっておりまして、でも特定の宗教を信じているということはないと。何でこんなに宗教を面白がっているのか。それは多分後半ではそういう話になるかと思いますが、次のスライドを出していただけませんか。

この本を去年出したのですが、学生だった私の東大の学生だった人がNHK出版に勤めていて、企画してくれたんですね。初めから書くとき固くなるから語り下ろしにしろということで、ライターの人を手配してくれたもので、そのせいもあって読みやすいと言われておりますが、このテーマは実は私が20代の頃に宗教を考えたいと思った、あるいは宗教を考えるにあたって、ここが肝だなと思った、それと関係しております。

「救い」ということですね。宗教って何が宗教を指すのかというのは、いろいろと議論があって、難しいです。例えば儒教は宗教なのかとかね。中には神道も宗教じゃないんじゃないのかという人もいます。仏教も宗教じゃないという人もいます。ただ救いの宗教というふうに決めるとかなり明確になるので、世界的に言うと、宗教、RELIGIONというのは救いの宗教をモデルにして考えているところがある。救いの宗教というのはキリスト教が基になっていきますけれども、ただイスラムも救いの宗教と言えるし、仏教を救いの宗教と言ってそう違くないかと。その辺もちょっとこの本にも書いていますけれども、日本でいうと、後から出てくる天理教とか金光教、私、この教祖の研究を最初にしたんですね。つまり、日本からも一神教的な救いの宗教が出てくるんじゃないかと。

救いってということは、この場合、農民が生み出したものです。ほとんど文字を読んだりしない人たちが生み出したということは、何か人類の中に基本的にそういう救いによって人が集まり、同じものを信じ、同じことを行うという、こういうものがあると考えると、救いの宗教がなぜ、かくも世界に浸透してきたのかを理解つできるのではないかと。世界の3大宗教というと、キリスト教イ

スラーム仏教で世界の数10億の人口の3分の2ぐらいはそうなっていると思いますね。イスラムは今伸びていますので、そのうちキリスト教を追い抜くと言われております。仏教圏、そして儒教圏と言っていいと思うんですが、東アジアは今、世界的にアンケート調査をやると、宗教を信じている人が少ないということになるわけなんですけどね。

でも、それにしては宗教になじみがあるんじゃないかなと思っています。学生によく言うのは、「君たち、宗教に関わったことがある？」と言うと「ありません」って言うんですよ。「受験の時に神社行かなかった?」。大体みんな行って、東京だと1月2日にうちの両親がいつも行っていたので初詣に行くんですがね、神田明神で結婚したので。その後近くに湯島天神があるんです。天神様の周りにもすごい行列が続いているんですよ。朝早く行かないと。若い人がたくさんいますね。これは宗教じゃないという意識かもしれないけど、やはりどこか宗教ですよ。そういうことで、救いということについて、まずなぜそんなに救いということに人類はハマっているのかとか、そういうことを考えたりします。〔スライド次へ〕

ところが、救いということが重要なのだというふうに思っている人はかなりいる。私、テレビの「こころの時代」というので、アドバイザーみたいなことをしているんです。NHKの日曜の朝の5時からやる。あれ見る人は結構いますよね。そういうものが大事だという意識はある。だからNHKもやっているわけです。その一方で、いや、宗教は怖いとか、危ないとか、それもありますよね。これが共存していると思うんです。実際に世界の現象を見ても、宗教で危ないことが起こっているとか、宗教が絡んでいるために、今のパレスチナとか、人類の危うさをよく表しているのかなというふうに思います。ところが、その争いごとというのは世界中にあつてですね、日本でもいつ噴き出すかわからないような。統一教会みたいなこともあるけれども、私がかかなり危ないなと思っているのは、国家神道というのですが、靖国問題に表れるような。東アジアの場合はむしろ民族同士で対決するみたいなところがありますが、これと宗教はどう関わっているかというのも重要な問題です。

一般には、ある時期までは私の若い頃というと、私は今、60歳以下の人は若い人だと思っています。(吉岡 ほとんど。僕は違うけど。)私が40歳ぐらいまでですかね、世俗化という言葉があって、セキュラリゼーション(secularization)というんですけれども、要するに宗教は次第に影響を減らしていくと。

ヨーロッパはいい証拠だと。アメリカはちょっと特別。だけれどもアメリカも変わっていくと。実際、アメリカは今変わってきました。21世紀に入ってから無宗教の人が増えてきた。日曜日にかつては8割、9割の人が教会に行っていたのが、行かなくなってきたんですね。

ところが、世界の人口全体を見ると、そうはならないわけですよ。ですので、世俗化論というのを主張していた、例えば有名なピーター・バーガーというような社会学者がいるんですが、彼はある時期から自分が世俗化を主張していたのが間違いだったというふうになりました。

つまり、人類が進歩して科学的な知識が普及していくと、宗教から離れていく。合理的にものを考えると、宗教は信じられなくなるというのは、どうもそうではないなというふうになってきたということです。私は70年頃、実は医学部に行くつもりだったのをやめて、宗教に行くため学ぼうとしたのは、いろいろな事情があるんですが、一つの事情はやはり宗教って必要なんじゃないかなと。

宗教なしで生きていくということにも怪しきみたいなことをちょっと感じました。例えばソルジェニーツィンという人が当時よく読まれましたね。これは要するにアメリカやヨーロッパの人がロシアソビエト連邦をけなすために持ち上げたみたいなのところがあるけれども、それなりの迫力のある作家だと思うんですがね。

彼はそういう神なしの世界というのは人類は耐えられない、というふうな主張をしていました。でもそれってトルストイとかドストエフスキーとかロシア文学にあるし、西洋の文学者も、実存主義者の中には無神論者と有神論と両方あると思いますが、カミュなんてどうですかね。

私、カミュについてはコロナ流行後に少し読み直したのですが、彼は卒業

論文に宗教的なこと書いたんですね。だから無神論的な実存主義者というのも、実は宗教の重要性を念頭に置いて、でも自分は信じられないみたいな、そんな感じだったと思うんですね。〔スライド次へ〕

サイモン&ガーファンクルの歌ですね。「明日にかける橋」という。この歌は、よく聞いたことがあるという方はどのぐらいいますか？ 最初に歌われたのは70年代の初めごろだと思うんですが、70年代に発表されたのが、今でも割と聞かれていると思います。その歌詞ですがね。〔スライド次へ〕生きるのに絶望し、疲れ果てている人に語りかける。自分はもう生きる値打ちがない。ちっぽけで、絶望しているから涙があふれてくる。そんな人に、私がそばにいるよ、私が橋になって、あなたが渡れるように支えてあげるよという、そういう歌ですね。ちょっと戻ってください。英語。すぐ歌いたくなっちゃうんですね。（吉岡 いいですよ。）

（島菌 歌詞を読み上げながら次第に英語で歌う）

実は身内の者が、夫がつかった時にこの歌が好きなんだよと言ってました。そういうふうにあの歌なんですけど、でも救いの歌。救ってあげる、救われるという、そういう内容ですね。こういうものが人の心を揺さぶる、打つ。こういうテーマというのは、これは歌ですが、物語にあり、映画にあり。そういう形で救いというのを宗教とちよつとずらして考えると、そういえばあの映画が救いだっただけという、そういうことに思いつくんじゃないかなと思います。

実はこの歌は、次のスライドのもう一つ先行っていただきましょうか。スワン・シルバーストーンという黒人ゴスペルグループが歌っていた歌ですね。ゴスペルって大体教会で歌われていたんですね。私、ある時アメリカに1年いた時に、いろいろな教会に入り浸っていたんだけど、黒人の教会はとにかく素晴らしい。どの教会にも素晴らしいクワイア（聖歌隊）があって、その中でも素晴らしい歌い手がありますね。そして説教者も何か神に憑かれたように話していくと皆が「ハレルヤ」と応じる、みんなすごく一体感があって、素晴らしい。本当に祝祭というもの。救いの宗教と祝祭的なもののつながりとい

うのが非常に重要だと思うんですが。

この「Mary Don't You Weep」という、泣くなマリアというのは、ヨハネによる福音書というのがあって、そこではラザロという弟が死んだ、そのベタニアのマリアというイエスがその人を慰めて、ラザロをよみがえらせるという、その場面がもとになっていますね。なので聖書の中の救いの場面というのが、例えば、辛い状況にある黒人たちの心に深く訴えかけて、それが歌になり、教会の礼拝になっていると。

私は一昨年まで9年間ほど、上智大学グリーンケア研究所というところにいました。そのためにグリーン、悲しみ、深い悲しみからどのように立ち上がるかというふうなことを考えたんですが、面白いのは、童謡というのは悲しみを歌ったものがとても多い。これは日本の特徴なのかもしれないんですが、童謡は悲しい。

それから悲しい童謡を作った作家が、作詞家が一番人気がある。野口雨情。この間も横浜に行ったら、『赤い靴』の碑が、赤い靴の碑というのは全国いくつもあるみたいですね。「赤い靴履いていた女の子、異人さんに連れられて行っちゃった」ですね。大事な人がいなくなったという歌がすごく多い。

童謡というのは、私の感じでは、私が子供の頃は、みんなが歌える。子供が歌えるし、大人も知っている。おばあちゃんたちもみんなで歌える。うちのおばさんたちは歌が好きで、お正月とかに集まるとすぐ歌うんですが。ところが今、みんなで歌える歌ってあるんでしょうか。

その中で、例えばアメイジンググレイスとか、この歌とか、世界的に共通に歌える歌というのができているのかもしれないなというふうに思います。

なので、この他に私が挙げた例は、宮沢賢治の物語、宮沢賢治の物語でも、例えば『よだかの星』というのもすごく人気があります。あれは孤独な、要するにいじめられて排除されているよだかの話です。よだかが鷹にいじめられたんですね。それが天へ燃えていくという、そして星になる。これは孤独な孤独な生き物が救いというか、この世を超えたところへ行けるという話なんです。他方、集合的な救い、みんなの救いというのがある。宮沢賢治にはいろいろなテーマがあって、それは法華経に、その両方のテーマが入っているからか

もしれないです。『グスコブドリの伝記』というのは、冷害、飢饉になる地域を救うという話ですね。そのために自分が犠牲になる。犠牲というテーマも宮沢賢治にたくさん出てきます。ああいうのは今もとても人気があって、もちろん『銀河鉄道の夜』も犠牲が出てきます。そんな感じで救いということが我々に実は非常になじみ深いものだなと。〔スライド次へ〕

中山みきと金光大神赤沢文治という人の伝記を研究していたのが20代の頃だったんですね。そして教祖たちの信仰が分かれば宗教も大事なところがわかるんじゃないか、と思ったのです。その頃は自分も結構傷んでいました。傷んでいて、それこそ職はない。しかも胃潰瘍になったりね。いろいろとつらい時期があったんですが。それとは格段に重みが違うけれども、個人的につらい経験をする農民が全ての人々の救いということを出し出す。どうしてそういうことが起こる？ ある意味ではシャーマン的な経験ですね。この世を超えた存在と向き合うということですから。どんな人にも当てはまる真理があり、それを自分は見出したのであって、その中には苦しみの経験があり、それは人々と通じ合うものであるということですね。

なのでつらい時期が長かった。そして何にもない、つまり豊かな農民で、比較的豊かな農民で、一生懸命働いてきて、自分の家を盛り立ててきた。その、なんというか、自分は本当はいいことをしてきたはずだみたいな、そういうことがありながら、どうしてそうなるのか？ ある意味では答えのない世界に入る。ところが、そこから立ち上がってくるのは何かというと、私は命の恵みと言っていますが、そういう中にも生きる力が湧いてくる。これこそ幸せだというものに出会う。生きていけるという何かがある。それを経験するという、そういうことだったと。

それが救いをもたらす至高の神様への信仰になっていく。もちろんその前にあったのは、神仏習合的な日本の中によくある、苦しむ人を支えてくれる仏であったり、神様であったり、そのための修行であったり、こういうものはたくさんあると思うんですね。それを通して、でも唯一の神、唯一の神といっても、万物に内在していますので。汎神論的というのが。神の中に全てがあ

るみたいな感じの万有在神論、これは汎神論とはちよつと違うのだという説もありますが、そういう考え方ですね。これは仏教でいうと華嚴經みたいな、一即全、全体、みたいな、そういう世界に入って、どんな小さなものにも神様は宿っている。こういう世界を生み出していくということになります。〔スライド次へ〕

私がこれに興味を持ったのはこの世の仕組みだと。これが私でも近づける世界だな、これはあの世の世界だとちよつとすぐには近づけない。これは、伝統宗教は西方極楽浄土だとか、天国に行くというのは、ち現代的にはちよつとついていけない。救いが向こう側にあるということと言わなくてはいけないから。そこはちよつと今…。この辺が戦後のなんていうか、狭さだと思いますが、戦後的な20世紀前中盤的な狭さかもしれないですが、そういうこともあって、新宗教はこの世の救いということを行っているところが近づきやすいんだ。つまり、この世の中に苦しみもあり、それに対する目に見えない何かの働きに答えがある。こういうことなんですね。

ただ、それにしては新宗教というのも敷居が高い。まあ要するに救済宗教の中に新宗教という部類がある。これは現世救済というのが特徴なんだけれども、現世に対して肯定的です。性的なものに対してあまり否定的じゃないし、この世で幸せになることがそのまま幸せ、救いになっているんですが、しかし、この世の成功をちよつと高く評価しすぎている。特に教勢拡張ということ、教団が広がっていくことがすごい自信の元になっていて、教祖を必要以上にとりつか尊ぶとか、そういう、ちよつとこう困ったなと思う特徴というのがある。それはカルトと言われるものに通じる。過剰に献金を求めたり。こういう要素があった。〔スライド次へ〕

2002年から「死生学」というのに入りました。これは宗教以後の世界に、そういうものに関わるようになった。これは1980年代ぐらいからスピリチュアリティというものが広がるようになった。宗教は嫌いだけれども、スピリチュアリティには関心がある。これを Spiritual But Not Religious = SBNR、

ReligiousではないけどSpiritual、こういう人が今アメリカでも増えてきているし、日本でも1970年後ぐらいからそういう人が増えてきて。アメリカではニューエイジ、日本では精神世界という言葉が広まっています。今、国際ヨーガデーがありますね。(吉岡 いつなんですか?) 6月何日かな【編註21日】、インドのモディ首相が主張して国連が決めちゃったんですよ。これは国連レベルの政教分離違反じゃないかと(笑)。

ヒンドゥー教には非常に都合がいいですよ。ちょっとモディって、危ない人なんですよ(笑)。そういう『「モディ化」するインド』という本、今出ていますね。それはそれとしてスピリチュアルな世界、ヨーガが代表。日本では気功、これ中国から来てるんですよ、気功、合気道とか。それから今ではマインドフルネスとか。これは仏教由来です。そういうのが先進国を中心に非常に広まってきて、もう宗教の時代は終わってスピリチュアリティの時代。

ところがそこでちょっと忘れられている分野は、医療の分野で、医療の中で死に直面した人に医学は対応できないでしょう、ここは。では宗教ですかというと、そうではない。そこに今、スピリチュアリティ、これがホスピス運動であり、死生学運動なんですよ。その死生学に私が関わるようになって、だんだん死生学的なメンタリティーになってきました。

先ほどの本と同じ、ほぼ同じ時期に『死生観を問う』という、これはあなた自身の死生観のためにというので連載したんです。私自身にとっても、自分が問われているという、自分が死ぬときどういうふうに死に向き合うことができるか。あるいは大事な人が亡くなったときに死をどう受け止めるかというのは、それは一人一人皆問題ですよ。

それに宗教を信じるか信じないかというのは、自分にとってちょっと信じる方に行けない壁があるという意識です。それに対して、死生観については、自分なりにやはり答えを出さなくちゃいけない。そういう中でいろいろ考えているんですが、例えばこれは2004年ぐらいにドイツのマリアフリーデン・ホスピスの所長さんの話を聞きました。これはエイズのホスピスなんですよ。

ここはカトリック教会が運営しているけれども、所長は教育学者だったりして、もちろんどんな人でも入れると。普通はガンなんですよ、ホスピスは。と

ころがここはエイズですので同性愛だったり、社会的に孤立した人が来る。「すべての人が無条件に受け入れられる」、これがそこの理念です。そこいらうそくがあるのは、いのちの木という名前がついていると思いますが、コルクの円板に彫り込んで名前が書いてある。これはそこで亡くなった人たちの名前なんですね。ここで死んできた人がこうやってお互いにつながり合っている。〔スライド次へ〕

シシリー・ソンドースは最初はソーシャルワーカーだったが看護師になった。それから最後は医師になって、聖クリストファーホスピスという現在のホスピスの最初のをロンドンで作りました。彼女が看護師の頃に、ユダヤ人のデヴィッド・タスマという患者さんとプラトニックに愛を抱くようになった。患者さんとの間に…、そんなことがあっていいのかという説もあるけれども、そういう関係だったと。彼が「たまには自分のために祈ってくれよ」という。その時に聖書を取り出して読もうとしたら、「いやいや、別に聖書の言葉を知りたいんじゃない。あなたの心にあるものを知りたい」と言ったので、翌日までに暗記してきた。暗記してきたのがこのデ・プロフデイスという、これは詩篇にある。ルオーの絵があります。

それから、バツハのカンタータにもある。こういうものなんです、「深い淵の底から主よあなたを呼びます。主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら。主よ、誰が耐えましょう。しかし、赦しはあなたのもとにあり、人はあなたを恐れ敬うのです。わたしは主に望みをおき、わたしの魂は望みをおき、御言葉を待ち望みます」というものなんですね。これを聞いて、デヴィッド・タスマが安らぎを感じた。シシリー・ソンドースは実は熱心なキリスト教徒です。タスマはユダヤ人なんだけれども、信仰を持つようになったかという、それはわからない。

そうではないのじゃないかと思う。でも、だいぶ安らかになってシスターと話をするようになったと。これは神がいて、あなたを救ってくれるというそこ、深い淵にいるという、深き淵より、そのことを感じ取る人が感じ取ってくれる

人がいたという、そこなんじゃないかな、と私は思うわけです。

それが、あなたが声に出していただいてという、そういうことを表す絵があり、音楽がある。これが西洋のキリスト教文化であって、宗教を支えているのは、そういう共感する人たちの、その中には耐えられない苦難があり、越えられない何かがあるという、そういうことなんじゃないかなということです。〔スライド次へ〕

左側は先ほどのマリア・フリーデンホスピスで、そこに放蕩息子の帰還という絵があります。イエスキリストが大きく描かれていて、哀れな放蕩息子、つまり親の財産を持ち出して勝手に使い込んでしまって、何もできなくなって親のところにむぎむぎ帰ってきたその子供、息子を、弟は何であんな奴を歓迎するんだと言ったけれども、こういう人こそが歓迎されるんだという話です。

レンブラントの有名な絵があるんですが、このホスピスには独自の絵が描かれていて、「無条件の歓迎」を表している。ここはそういう場所なんだ。全ての人が歓迎される。右側の写真は山谷です。上智大学グリーンケア研究所で実習によく行くところで、私も何度か行ったんです。訪問看護ステーションコスモスってありますが、これは別に何の宗教でもないんですが、今山谷はどういうところかという、昔は日雇い労働者の街、そのあと路上生活者の街に、要するにドヤという木賃宿ですね。宿をひっくり返したドヤ。だいたい今2,000円ぐらいで泊まれる。

そうすると生活保護で暮らしている、そういう人たちが来ている。身寄りのない孤独な高齢者の吹き溜まりのような街になっている。吹き溜まりというのは、ちょっと差別的ですね。そういう人たちを助ける仕事をしている看護師さんや、ボランティアの人たちがおります、おはなという入居施設も持っている。一部屋、四畳半か六畳くらいじゃないかと思うんですがね。

そういうところのお年寄り、一緒に食事しながら暮らしている、こういう場所です。そしてお墓がある。吉水岳彦さんという素晴らしい住職、そして光照院というお寺があって、そこでコスモスの世話になった人たちのお墓があり、

さんゆうかい

山友会という神父さんが始めた集まりや、希望の家というキリスト教徒が始めた入居施設でなくなった方々、そういう方たちのお墓がある。最後に共にいた人たちがその後もある場所、死の後もそういうイメージを持てるということがいかに重要かということがわかります。〔スライド次へ〕

もうそろそろ終わりにしたい。新美南吉、宮澤賢治、私がグリーフケアでよく引き合いに出していました野口雨情、宮沢賢治、金子みすず、それから新美南吉は『ごんぎつね』というのでよく知られていますけれども。悲しい子供というのがベースにある。

早くに母親を失ったというようなこともベースにあるんですが、その中にこの『うた時計』というのがあって、これを今、少年院で読書会をしているんですけど、その少年たちがこの話を非常に喜んで読んでくれた。よく中身を理解して話をしてくれたので、どうしてかなと考えているところです。うた時計というのはオルゴール付きの時計です。これをおやじさん、薬屋さんなんだけど、おやじさんが持っている。ところがその息子の周作が放蕩息子なんです。

三十何歳になって親のところに帰ってきたんだけど、そこに一晩いてまた出ていくときにうた時計を盗んで懐に入れていた。ところが、そこで少年に会うんですね。廉（レン）という名前。それが清廉潔白の廉だという。その子供と話しているうちに。悲しくなるといって、うた時計を返す気になった。そういう話なんですね。これが少年たちの心に非常に響いた。彼らは物語を求めている。少年院の中ではよく立ち直ろうという意志を持つように教育しているわけですが、なかなかそういう物語には接しないんですね。

もちろん、教誨師、宗教的な教えをしに来る人もいるし、カウンセラーも来るんだけれども、そういう芸術的なもの、つまり救いの宗教と芸術が分かち合っているようなものは、実は非常に近い。もともと多くの芸術は宗教芸術ですよ。ですので、そういうことをよく表しているなと思います。次お願いします。もうそろそろ終わり。〔スライド次へ〕

最後はこれなんです、この話、このクシュナーという人は、アメリカ人のラビです。ユダヤ教のラビで600家族ぐらい、2,500人というんですけど、そのぐらいの人の世話をしている。日本でいうお寺の住職みたいなコミュニティのスピリチュアルなケアをしている。

ところが、自分のところに生まれた子供が、老いが早く来てしまう。それで実際に14歳の誕生日のすぐ後に亡くなった。しかし、何でこんな子供が苦しむようなことになったのか。そういう問いを抱いて、それに対する答えを求めた。ラビだから答えを言わなきゃならない。ここでこのラビ、クシュナーさんが考えていることは、現代人の心に響くものがあるのではない。

つまり、宗教を信じられない。「何でこんな。神がいるのになんでこんなことになるのか」ってことが多い。にもかかわらず、彼の答えは「それでも神がいる」みたいになるんですけれども、この間、遠藤周作の話をしたと言われました。（吉岡 佐伯さんがちょっと対談の中で『沈黙』という話しを…）『深い河』というのがありますけれども、遠藤周作の神様というのは弱い神様で、人を助けることができない。クシュナーもそういうのに近い答えを出している。なので、その辺のことも後で話ができればしたいと思いますが、この辺で終わりというところであります。

吉岡 ありがとうございます。ではしばらく二人でお話をしてから、休憩を挟んで皆さんと対話したいと思います。

まず最初に、現代の多くの人は宗教ってすでに過去のものであるかのように考える傾向があると思うんです。けれども本当は、宗教は全然過去のものではない。今も宗教というものは存在するし、社会的にいろいろな問題にかかわっている。にもかかわらず、なんとなく過去のものと考えがちなる理由の一つは、伝統的な救済宗教のイメージが今だに強すぎるからなのかな。いわゆる新宗教と言われるものは、現世における幸せ、心の解放といったことが強調される。伝統宗教にももちろん現世利益もあるんですけれども、究極的にはやはり死後の救いみたいなものへの関心が強いと思います。それは、今と近代以前の人々との生活世界が異なっていたからではないかと思うのです。

過去の多くの人たちの生活、人生というものを想像したときに、私たちのそれに比べて非常に過酷であったということです。

寿命も短いし、病気とか不慮の事故とかで死ぬ可能性が、現代の我々と比べると非常に高かったと思います。医療が未発達で、食糧事情も安定していない時代においては、多くの人にとって死が常にすぐ近くにあった。生きていることは非常に希有な状態というか、有難いこととして感じられたと思います。「冥利」という言葉がありますが、これは人間が気づかないうちに神仏の加護を受けている意識を表す言葉ですね。

もちろん現代の世界でも、そういう過酷な状況で生きている人はいますけれども、過去にはもっと多くの人々が、しよせんこの世での幸せなんて望めない、現世は絶望しかないというような意識で生きていたのではないかと思う。そうした人生を送っている人にとっては、死後の救済みたいな希望は非常に強く訴えてくるだろうと想像するんです。

だから伝統宗教における死後の救済というのは、現代人から見ると何かすごくペシミスティックな世界観のように見えるかもしれないけれども、この世の安楽を望めない人々にとっては死後の救済こそがリアルな希望のイメージだったのではないかと想像します。

そうしたことを想像するのは、僕は宗教ではなくて芸術の研究者だから、宗教そのものというよりも、小説とか芝居とか美術などの作品を通して、その表現の中に現れるあの世や神様のイメージを通して、過去の人たちが生きていた世界観な少しでも近づきたいと思う。そのときに一番障害になるのは、現代の我々が普通に生活することで身につけてしまう日常感覚です。管理された医療とか食糧事情とか、ある種の安定した生活状況では、異界や超越者に関わるイメージが変わってしまう。同じものを見ていても、過去の人とはまったく違う見方をしているのに、それに気づかない。しばしば現代の方が「進んでいる」かのような先入観に導かれて、昔の人々は知識がなかったために迷信にとらわれていた、などと考えてしまう。

それからお話の中で印象的だったトピックは新美南吉の話ですね。『ごん

ぎつね』というのは、今でも小学校で教えているらしいですけども、長く人気がある作品ですね。僕が小学校のときは他にも『牛をつないだ樁の木』というのも載ってました。あれは確か人力車夫の海蔵という男が、峠で喉が渴くのでここに井戸があれば便利だろうと考えて、自分が儲けたお金をコツコツ貯めて井戸掘りの費用にするという話でした。それでやっと貯めて掘ろうとしたら、地主が許してくれないので今度はそれを説得するのに苦労して、やっとのことで井戸が完成する。海蔵自身は日露戦争に徴兵されて戦死してしまうんですが、井戸は残って峠を越す人々の喉を潤し続けるのです。車夫がお金を貯めて峠に井戸を掘ったということだから、歴史に残る偉業とかではなく、ほとんど無名の善行ですね。見返りも名声も求めない。表立って信仰とか宗教心は出てこないのですが、むしろこういう何気ないお話の中に宗教的なものを感じます。

もう一つ物語の中に宗教的テーマを感じる瞬間は、ある種の不可解な部分なんです。言い換えれば教訓としてあまり収まりが良くないような部分。細部と言えば細部なのですが、これはどうしてこうなっているんだろうというような側面です。『うた時計』で言えば、放蕩息子の周作はオルゴールを盗んできたのに、道すがら知り合った少年の話を聞いて、その少年の姉が亡くなる時にオルゴールを聞いていたみたいなお話にちょっと感じ入って反省する。でも自分から返しに行って謝るんじゃなくて、これ間違えて持って来たから返してくれと少年に託すんですよね。まあズルいというか、本当に心から悪かったと改心したわけではないですね。

それで後から時計屋の親父が怒って追いかけてくるのだけれども、捕まったりしない。つまり逃げおせるといふか、罰せられない。悪いことをしているのに罰せられない世界なんです。これを少年院の子たちがどういふふうを受け取ったのかわからないけれども、こういう点が僕にとってはすごく魅力で、そこに宗教的なものを感じます。もしもそこで捕まって、すみませんでした、これから人生で直しますなんて言わせてしまうと、ちょっと興ざめする。

この資料をいただいてから、新美南吉ってほかにどんな作品があったっけっと思っ、青空文庫にあるのを全部読んでしまったんですけども、不思議

な話がありますね。例えば『疣^{いぼ}』という短編があるんです。田舎に住んでいる子供の兄弟のところ、町からいとこの子が遊びに来る。都会の子だから雰囲気は違うのだけど、子供同士なので一緒に仲良く遊ぶ。そのうちに兄弟の兄の手に疣が二個あるのを見つけて、町の子はそれが欲しいと言うんです。それで、二人の腕の間にお箸を置いて「疣、疣、渡れ」とお呪いのようなことをするんです。いところが町に帰った後、今度は兄弟二人が町を訪ねることになる。疣はうまく移ったかなと考えながら、ワクワクして町に行くんだけど、期待と違うんですね。町には他に友達もたくさんいて、楽しいことも多いから、田舎でのように三人で仲良く遊ぶという感じにはならず、すっぱかされてしまう。兄弟は寂しい気持ちで帰るんだけど、こんなことはこれからもあるだろうから、平気で行けばいいんだ、と思ひあう。別に冷たくしたいとこの子を恨むというようなことはないんです。この話でも僕がいちばん惹かれるのは、子供たちを結びつけるのが心ではなくて疣という身体的なものであるという点で、「疣はうまく腕についたらうか」と想像することに感動するんです。

僕自身の宗教経験というのは、自分が何かの宗派に入信しているということはないんですけれども、亡くなった母が、毎日お日様が上がるとお祈りするみたいな習慣を持っていました。自然宗教ですね。母の嫁入り先の家は浄土宗だったので、高齢になった時には五重相伝という儀式に参加していました。そんな厳しい修行とかじゃ全然ないんですが、その時僕はまだ十代だったので、物好きだなあと見ていたのですが、お金もかかるんですね。その代わり何か位がもらえる。位というか視覚というか、亡くなった時に戒名が最初からランク上になる、みたいな。

そんなこととしてたんですが、お経の内容とかにはあまり興味ないみたいでした。僕は仏典をよく読んでいて、こういうことだよと教えてあげると、あなたは何でもよう分かるなあと言いつつ、あんまり興味はないというか、理屈はどうでもいいみたいな感じでした。だから彼女にとっては、形は確かに仏教だけれども、本当は仏教として受け取っていないんじゃないかと思ったんです。自然宗教みたいな解釈で何でも受け入れていたんじゃないかなと。

亡くなる前に何ヶ月か北白川のバプテスト病院に入院してたこともあるん

ですが、バプテスト病院だからもちろんキリスト教なんですよ。するとある時間に牧師さんが病室を回ってくるというプログラムがあって、もちろん入院している患者さんたちは必ずしもキリスト教徒じゃないから、面会を断ってもいいんです。でも母は、別に牧師さんに話を聞いてほしくはないんだけど、せっかく来ると言うてはる人を断ったら気が悪かって、話をしたみたいです。後で「どうだった?」と聞いたら、「何言うたかるかもひとつ分からなかった」と。でそれからは「もうええわ」みたいになって断りました。母のこういう生活と一体化した自然宗教みたいなものって、本人は宗教とはまったく思っていないでしょうけれども、日本には今も結構根強くあるんじゃないかなと思います。

島蘭 少し答えてからお休みにしますか。今、今お休みになる前にちょっとやり取りしたほうがいい?

吉岡 5分か10分くらい話して休憩しましょうか。

島蘭 前から吉岡さんっていい人だなと思ったんですけども、お母さんの話を聞いてよく分かった。

太陽に向かって手を合わせるといってね、黒住教の影響かしらって思ったり、あるいは日蓮かしら、そういうので自然宗教というと、でもやはり救済宗教の息がいろいろかかっているというか、そういう感じがします。それが日本の特徴で、意識しないうちに、実はその裏には深いものがある。お遍路なんかも本当に好きですよ、たくさんの方が行きます。(吉岡 そうですね。)お経を読む人もいますよね。それから真言を唱える。意味がよく分かっていない。

日本人の信仰についてまた後で話したいと思うんですが、最初におっしゃった救いの話ですが、私、エジプトに6週間しか過ごしていない、イスラムの世界のことをほとんど知らないと言ってもいいんですけども、6週間で過ごしたんですね。2006年でした。その頃はカイロ大学にいたんですけども、カイロ大学の日本学科で日本の宗教について教えた。

最初は日本には宗教なんてないでしょうと言われてたんですよ。つまり、宗

教というのは一神教だけだと教えられてきた。でも仏教の説明をしたらそれは宗教ねと。そんな感じになるんです。ほとんどの女子学生がベールをつけています。これは1980年代にはなかったんですね。そして、子供を育てるときにはしっかりとクルアーンを読めるよう、要するにしっかりとアラビア語。だからアラビア語を教える仕事はクルアーンをしっかりと読めるための仕事で、ハマースはイスラム同胞団というのから来ているわけですが、イスラム同胞団の人がそういう正しいアラビア語を教える仕事をしていたりする。

非常にそういう社会の基礎の人助的なことを、ムスリム同胞団がやっているんですね。だから、カイロ大学の学生に聞いても、どっちかというイメージが良い。だから選挙で勝っちゃったわけですね。その後、今、軍事政権で潰されているんですが。そのイスラム教徒は、死後の救いは相変わらず非常に重要なんです。

なので、世界中のことではないかと。そしてどっちかと言えば、今イスラムは日本人の中でもイスラムに改宗する人がわずかではあるけれどもいる時代で、アメリカなんかかなりいる。そういうことを見ると、来世での救いというのは実は滅びていないんじゃないかなと。永遠の魂という考え方、そして死んだ後にそこで終わりということはかんたんには言えない。西洋人もそれはそうじゃないですね。やはりそれで終わりではないでしょう。つまり死で全てが終わるというのではないと感じている人が多い。

最初の話ですが、確かに平均余命が短かった時代、子供がたくさん死んだ時代、戦争でいつ死ぬかわからない時代だから、多分来世の信仰が強かったというのは一面そのとおりだと思う。日本は中世にこそ西方極楽浄土の信仰は強かった。近世で平和な徳川時代に儒教の影響も大きくて来世信仰が一面衰えてきたけど、民衆の浄土信仰はそこでも伸びていたと思いますね。ただ、明治になってから次第に庶民も現世信仰になってきたんですが、これは世界的に見るとちょっとローカルかもしれない。

それから、ただ、言いたいことは、来世の信仰ということは、現代においても相変わらず重要なんじゃないかしらと。それで、クシュナーの話ですけれどね、クシュナーはユダヤ人なんですね。ユダヤ教には来世の救いという考

えは弱いんです。キリスト教やイスラムと違う。なので、クシュナーの話で、私がここはちょっと違うんじゃないかなと思ったのは、そこどころが言われていない、神様がいるのだとすれば因果応報に当てはまらないことがいかにも多いんじゃないかと。何で正しいことをした人が報われないのかということですが、この世を超えた世界がまだあるというふうに考えると、いや、そこで報われるという、これはやはりかなり今でもすごくあると思います。で、日本人でも生まれ変わりを信仰する人が結構いる。

吉岡 そうですね。現代人にとっても死後の問題というのは、非常に関心を持っていらっしゃる方も多いと思うので、後半でお話したいと思います。今エジプトの話がされたので思い出したことを一つだけお話しします。実は僕、人生で初めて訪れた外国はエジプトなんです。自分から行きたかったというより、たまたま大学で知り合ったエジプト人の留学生がいたのがきっかけです。1980年頃、僕はドイツ哲学を勉強していたのでドイツに行こうとして、パキスタン航空の南回りの格安チケットを買ったら、途中カイロを通過していくんですね。そのことを言ったら、その友達がぜひカイロで降りろって言う。それでカイロで出国して、一緒に2週間くらいエジプトを見学しました。彼の家にも行ったんですけど、初めての外国滞在だから強烈な印象を受けました。イスラム教のこともあまり知らずに行ったのです。一番強い印象としては、毎朝5時頃に音質の悪い街頭のスピーカーから流れるクルアーンの朗唱ですね。最初はびっくりしたんですけど、こういうことかと思って、すぐに慣れました。毎朝聴いていると、だんだん気持ちよくなってきて。

テレビをつけると、小学生の女の子がクルアーンの朗唱大会みたいなのをやっていて、むちゃくちゃうまい。いや、アラビア語分らないから本当はうまいかどうかわからないんだけど、聴いているとすごくきれいなんですよ。これは何だろう、日本でものど自慢大会で、小学生の天才演歌歌手とかいますよね。そういう感じです。何も知らないで不敬なことかもしれないけど、先入観なしに直接普通のエジプト人のムスリムの生活の中に飛び込んで信仰の実践の世界に触れたのは、自分にとってはすごくよかったと思います。

島菌 80年代にはカイロ大学の女子学生はつけていなかったですね。ベールを。これがつけるようになった。この変化ですね。これは西洋文化、西洋の近代文化の進歩みたいな観点に対する疑い、これが世界的に、それからずっと広がってきていて、物質的な繁栄をもたらす西洋の科学技術と結びついた文化、これに対する不信というのが現代人にはかなり深くある。

吉岡 それではちょっと休憩を挟んで、皆さんから発言をいただきたいと思います。

* * * * *

大西 お待たせいたしました。それでは時間になりましたので、後半入っていきたいと思います。最初に少しお話をいただいて、その後会場の皆様からのご質問を受け付けたいと思います。よろしくお願いいたします。

吉岡 ネットのコメントで「今日は神様について雑談するんじゃないのか？ 宗教の話ばかりじゃないか」というのがあったそうなので、「神様の話」というのはどうすればいいのかとちょっと考えていました。まず最初に島菌先生と少しだけやりとりを続けたいと思います。最後に仰った現代における来世、死後への関心というのは確かにあると思うんですけども、必ずしも伝統的・歴史的な宗教の文脈じゃなくて、さっき言われた「スピリチュアル」的なものですよ。

東京大学の大学病院で救急医療に携わっておられた矢作直樹という人の『人は死なない』という本が話題になったことがあります。つまり魂の不死というテーマですが、特定の宗教の話ではなくて、現場で死んでいく人をたくさん見てきたお医者さんが そういうことを言い出すというのがすごく説得力があると思います。これが現代のスピリチュアルなものじゃないかな。一般の人が死後の世界について考えようとすると、その前に宗教という壁が立ちほだかる。するとなかなか受け入れられない人も、死の現場で働いてい

るお医者さんが言っていると受け入れやすいかもしれない。お医者さんは科学を代表する存在と考えられているから。そういう人が言っているということで、あれも一種のスピリチュアル的なものだと思うんですけども、いかがでしょう。

島菌 神様についての御質問があったということなんですけれども。日本人は一神教というよりは、多神教に馴染みがある。多神教というよりは、さらにアニミズムだと。アニミズムって何かというと、これは いつ、そういうアニミズムが日本に出てきたという話は横に置いておいて、簡単に言うと、あらゆるものに霊が宿っている。

霊と神はどう違うかという、神はいわば人間以上ですね。一神教になるとすごく遠くて、ちょっと簡単に言うと、それが全てを支配していると。こういうことなんです、アニミズムというのは、あらゆるところに目に見えないものがあって、時には人間以下でもいいと。だけれども、心はあるという感じ方です。

最近、ツイッターというのを見てますと、動物の画像がたくさん出てくるんですね。私、今、関心を持っているのは、動物はどんな悲しみを持つのかということです。愛情は持っていますよね。猫にしても犬にしてもですが。そういう悲しみを持つんなら動物に宗教ってないのかということがあるけれども。そういう動物の心というものに、非常に関心がある。ペットが亡くなるととてもつらいし、そういう存在を尊いものだという認識。これが現代的にあって、かつては動物なんて人間より低いものだったけれども、今はだいぶ変わってきた。それは日本人のアニミズムに近い。さんせんそうもくしつかいじょうぶつ山川草木悉皆成仏、つまりあらゆるものを仏性がある。これは仏教の教義からいうとちょっと違うんだけど、東アジアにさらに日本に来てそうなった。日本は神道の国であり、あらゆるものに神が宿っていると。そうすると、神、むしろ「神という霊」があります。アニミズムの中でも、特に手を合わせる対象、日本人は良く手を合わせる、頭を下げる。いつも頭を下げる。頭を下げるというのは、生きている人間ばかりでない。一番多いのは死んだ人じゃないでしょうか、いつ自分が手を合わせるかと考えると。

でも今、生き物が大事になっているように、死者がスピリチュアリティの非常に重要な要素になっている。これはね、『千の風になって』という歌がありますけれども。あれは「私は墓の中にいません」ということで、仏教界の人が非常に困ったというか、お墓に来なくていいのかと（笑）。うちの母はこう言いました。「いや、あなたしっかりお墓に来るんだよ。あなたが来るときは、お墓にいるから」と（笑）。

でも空のどこにでもいる。これまで昔のアニミズムというのは、もっと土着的で地面に近い存在だったのが、人が子供になって、それもどこにでもいる、でも大きな存在でなくて、小さい存在。こういうのが現代人の宗教意識に新しいスピリチュアリティの一つの特徴かもしれない。私は命の恵みと言ってはいるんですが、「スピリチュアリティにとって大いなるものでなければだめよ。大いなる生命、大いなるものを尊ぶというのが基本よ」というふうに、高木慶子シスターに、いつも「あなたは、それあるの?」と聞かれるとちよつと横むいてしまったんですが。それよりも命の恵みというのが、自信を持って言える。目に見えない命の働きというものが、現代人のスピリチュアリティとしては、わかりやすいものじゃないかなと。

吉岡 そうですね。さっきお話した僕の母も『千の風になって』は好きでしたね。何かそういう日本人のアニミズムと呼ばれるけれども、人類学的な概念というよりは、実際のアニミズムというのはかなり融通無碍というか…。

その母が亡くなる前に「もうお墓はいらん」って言い出したんですよ。母が入る予定だった嫁入り先のお墓は、子供の頃から馴染んだ場所ではないので入りたくない。それで墓じまいみたいなことをして、早くに亡くなった父のお骨と一緒に、母の希望した通り共同墓地に入れたんです。僕は正直、場所はどこであれ個人のお墓はあった方がいいなと感じていました。共同墓地入れるとお骨は出せないの、こっそりお骨の一部とってあるんですけど（笑）。

島菌 我々が若いときは、吉岡さんと私を同じにしてしまいますが、死について考えました?

吉岡 僕は非常に考えましたね。やはり思春期ぐらいですね。

島菌 私はそんなに考えなかったと思うんですね。ところが今の若い人は割と死についてなじみがあるというか、どうなんでしょうね。そういうふうには私は感じています。(吉岡 そうですね) コロナの時期に、NHKの比較的若いディレクターがよく、グリーフケアについての番組を作りたいというのを聞いたんですね。というのは、自分も経験があるし、世の中の人たちが死に目に立ち会えない、グリーフケア。さよならのない別れといましようか、そういうもので一段と孤独を痛切に感じる機会になっている。

つまり、死というのは孤独と私は対応していると思うんですね。なので聖書の昔の人がつらかったのは、病気になったり死んだりして、みんな共通にそういう経験をする可能性があるという厳しさだったんだけど、今の人の厳しさは孤立し、孤独になる。誰でもそうなる。そのことを普段から感じている。そして、そうなったときには本当につらい。そういう辛さ。

吉岡 なかなか受け皿がないということですかね。現代だって、やろうと思えばそういった孤独のつらさみたいなものを共有する場を、社会の中につくろうと思えばつくれるのに、それが無い。家庭も学校も地域の共同体、お寺とか教会とかいう宗教的施設にしても、誰でも気軽に行けるところじゃない。一部は観光地にはなってるけど、突然悩みを打ち明けに行っても必ずしも受け入れる体制ができていないところは少ない。

島菌 宗教は、この世界というものを共有している人たち、こういう場合の死、こういう観念を共有する、そこへ入っていかなきゃいけないと思うんですね。だけれども、求めているものはつらさを分かち合うということと、さっきのどんな人も受け入れるというのは、いわば裸になった痛みがある魂を響き合わせるような場がほしい。そのためにいろいろな集いとか、カフェとか、そういうものがあるんじゃないかと思っているのです。

最近ちょっと考えたのですが、当事者という言葉は、日本語でよく使う言

葉ですかね。被害にあった人、差別をされている人、弱い痛みを持っている人ですね。あるいはその関係者なのですが、万人当事者。これは宗教の歴史でいうと万人司祭という言葉がありました。教会組織ではなくて、一人一人が聖書をちゃんと読んで、聖書を通して神と出会う。これが本来のキリスト教だというのがプロテスタントの原理で、これはルターが唱えたものです。ところが、司祭というのはまだ、ちょっと上の段階になるんですね。ところが当事者というのは、答えがない中で、お互いに照らし合う行動をとる人たち、なので万人当事者の時代は万人語り部。つまり、さっき吉岡さんが話し、私も母の話をしました。そういうふうにしてお互いが心を開く、そういう場が開けることが、前へ進んでいく。かつての救済、救いの代わりにそういう場ができていて考えているわけです。

吉岡 ところで最近、「神」という言葉を使う人が増えてきたことはありますね。特にSNSなどで、ちょっと気の利いたことをたまたま言うと、「吉岡先生、神」(笑)とか。言葉そのものは結構手軽というか、それはアニミズムとは逆かもしれないけれども。

それからペット、昔は先ほど言われたように犬とか外で飼って、残飯をやっていた。死んだら庭に埋めたり。現代は室内で飼って、人間と同じような食べ物あげて、死んでもお金をかけて人間と同じような葬儀を、ペットに対してするではないですか。ある意味動物が人間に近づいてきている。動物の魂も人間化されている。僕は何となく現代よりも昔の方が、つまり動物は人間とは違う存在として扱われていた時代の方が、彼らは神様に近かったというか、いろんな種類の魂を許容するアニミズムが生きていたように思うのです。

島蘭 小林一茶は50歳になってやっと結婚して、子供が次々と亡くなって、また小さい時にお母さんで亡くしたりしている。悲しい俳句がすごく多いんですが、小さな生き物の句がたくさん、つくられるわけです。「痩セガエル負けるな一茶ここにあり」とか。ホタル、ホタルが命の象徴。それから、いろいろ

ろな生き物が出てきますね。ああいう感覚は江戸時代に持っていたのだけれども、もしかするとそれが沖縄とかそういう日本の既存の文化にあったものが続いている。仏教はそういうものを否定しなかった。それで救いの宗教の一神教的な一つの原理が全てを支配しているという、そういうものを求める気持ちは常に持っていたんだけれども、それとは違う要素を抱え込んで、神仏習合だと思っただけでも、世界の中でも日本をちょっと特殊にしてるなと思います。

吉岡 そうですね。自分の知っている人が生まれ変わって、人間以外の姿で現れてくるという物語がいっぱいあります。それが、犬とか馬とかだったら人間に近いからまだわかるんだけれども、たとえばラフカディオ・ハーンの『怪談』には「蠅のはなし」というのがある。お店で働いていた信心深い下女が貯めたお金を主人に預けたまま病気で死んでしまうと、その直後真冬なのに大きな蠅が現れて家の中から出て行こうとしない。それで、この蠅はあの子じゃないか、預けたお金で供養をしてくれと頼みに来たのではないかと話していると、蠅はポトリと落ちて死んでしまうというのです。大きな動物として生まれ変わってくるよりも、こういう蠅とかホタルとかいった虫のような小さく儂い存在に転生する方が、日本のアニミズム的な想像力をよりリアルに表現しているように思います。

島菌 普通の死者がやって来るというのは、蝶々とか。小林一茶で思い出したんですが、「蝶とぶや此世に望みないやうに」すごく皮肉だなと思います。

そういう生き物感覚というのは、日本にとってはやはり神ですね。神的なものがそういう形で現れてくる、小さい神。最近ではキリスト教でも「小さくされたものイエス」という考え方が語られますね。遠藤周作ともつながるけれども、痛みのあるところにこそ神があって、そこはまた神、大きな神が現れるような信仰じゃないかと思います。さっきのクシュナーのお話ともつながるんですが、むしろそういう痛みのあるところにこそ宗教的な感性が現れるので、大きな解決があるというのは、ちょっとかつての宗教が持っていたある側面が、

ちょっと現代にそぐわない側面でできているというか、解決があるということは、おのずから何か排除が入ってしまう。そういうところが現代の問題なのかと。

吉岡 この辺りで会場をオープンしましょうか。

大西 どうもありがとうございました。では会場からのご質問を受け付けたいと思います。

質問者 A お二人とも非常に興味深い話をまとめていただきありがとうございます。私は宗教について、最近すごく考えているんですけども、まず今日のお話に出なかった点について、多分難しいですけども、頭に浮かんだお答えだけでもいいんで、ひょっとしたら解決方法があるかもと思おうかがいします。

一つは制度の問題です。カルトの問題でも他の問題でも結婚とか、そういうものどうしても結びついてしまう。日本では、肉食妻帯という言葉がある、親鸞がそれを廃止したことが始まりだと。イスラム教ですかね、一夫多妻制を宗教的に認めている国がある。それが一つ。

それからもう一つは、お金の問題です。制度的に宗教が小さいのはそうしてというのがあるんです。それは必要だったらわかる。人間を不幸にする。不幸にしていることが一つはお金の問題だと思います。もう一つは、それと結びついて権力の問題。イスラエルとパレスチナの問題、宗教の問題で。権力が個人的な問題と非常に危険なものとして、それが宗教の名を借りて現実を侵し、それはしょうがないんだけども、自分なりに頭の中で整理したいということでお二人のお話をお伺いしたいと思います。

アートは、昨年のテーマでしたけれども、不思議なのはキリスト教もピエタ像とかいろいろとあるのですけれども、ユダヤ教、イスラム教は偶像崇拝禁止なので、描くことができない。でも仏教は非常に重要で、私はそんなに知らないんですけども、浄土真宗では大事な方便で、仏像などを描いたりする。一番それが私は感動したのは、南無阿弥陀仏という文字が絵になっていて、

人間にはやはりイメージが必要だと思うんです。それを通じて宗教が成り立っている。

吉岡 4つもあるから、2つずつ分担しますか。

島菌 アートの方はお任せしますね。性、金、権力、この3つ。私は、宗教は暴力というのがかなり基本的なテーマだと。暴力。人は争い合う、場合によっては殺し合う。これをどう抑えるか。それで社会の秩序が成り立つ基本ですよ。

なのでデュルケムという社会学者は、人が結合することと宗教というのはほとんど同じだと。共同生活の共同観念ができるということが宗教の根本で、そして祝祭的な一体化を持つということが宗教と深く結びついている。それに私は、かなり近い考えを持っています。なので性は家族を持つということと関わりがあります。基本的にはそういう自然宗教的なものも生殖の肯定、生命が増える。これは食べ物、農業、穀物が実りがいい。こういうことと子供がたくさん生まれる。こういうことをほめるというのがもともとある。

だけれども、これはインドの宗教がかなりそこにあったと思うんですけれども、なぜそういう独身性というものがそこまで根本的なものになったのか。これは禁欲ということとともに、家族ができるということは、テリトリーを作り、人が争い合うことの基とつながっている。そのことに対する反省。そして、子供がつくれば子供が増えて、そのテリトリーを増やさなきゃいけない。こういうのは旧約聖書の初めには、産めよ増えよ地を支配せよと出てきて、それがいないんですね。そこは大きな違い。インドの宗教とパレスチナから出てきた3つの一神教とは。

それでやはり、インドから中国にかけてというのは人口が多いですので、人が増えればテリトリーを持って争い合う。これをどうやって抑えるかということが宗教の基本的なモチーフとなってきたんじゃないか。

中国の方が生殖に対して非常に肯定的です。中国文明の中でも。そこへ仏教が入って、そこまで成功したということは、そういうことがあるのかなと。

暴力、つまり仏教でいえば五戒ですね。不殺生戒、人を殺すな。これは世界の宗教が共有しているもので、どうやったら暴力を抑えられるか。キリスト教の場合は、その暴力を抑えるということがキリストの犠牲によって可能になっている。その罪というのは、暴力ですね。自分の暴力性を認めるということであって、そういうふうにと考えると、本来は宗教の基本には暴力の否定があるんだけれども、それが逆に集団の団結という方向へ転化するので、それがまた新しい排除になるという逆説がずっと宗教にはつきまといてきて、これをどう諸宗教が共存できるという現代の課題は、宗教が持っている暴力を否定するという「理性あれ」と集団でまとまるという理想の矛盾みたいなものをどう解決するかという、そこにあるのかなか。ちょっと抽象的になりましたが。

吉岡 ええと、僕は何担当でしたか？ 宗教とアート、つまり偶像崇拜ということですよ。僕の理解する限りでは、キリスト教もイスラム教も、イスラム教は今でもそうですけれども、仏教も原始的な段階では偶像を禁止しているんですよ。禁止とはっきりしていなくても、あまり偶像を作るのはいいこととされていない。

仏教でも最初の頃は仏像なんか作らず、仏足石とかシンボリックなものだけを拠り所にしてた。けれども芸術というのは偶像崇拜を避けて通れないんですよ。偶像化できないものの偶像を作る、というところから出発する。これは純然たる僕の空想なんですけれども、例えばイエス・キリストとかムハンマドとかそういう人たちが教えを説いたとき、自分を偶像化するのではなくて教えを理解してほしかったのだけど、それでも弟子はやがて、自分を個人崇拜するようになるだろうと、気づいていたような気がする。弟子たちは自分が説いている真理ではなくて、自分という人間を崇拜する方向に傾きがちだよ。「ああ、こいつらこんなことを言っている、絶対偶像を作るな」と分かっていたと思うんですよ。証拠はないんですけども（笑）。

そこからすると、やはり芸術の世界というのは、そういう人間の弱さから出て来ているとも言えます。だって、偶像なしで信仰をずっと維持するって、ものすごいきついというか、誰でもできることじゃないんじゃないですか。だか

ら芸術というのは、本当は偶像ではいけないんだけど、それでも偶像化というのは避けがたい、そのことを認めた上で、その上で何とかしよう、みたいなことだと思うんですね。

キリスト教の場合には、おそらくその前に地中海の多神教の世界が非常に根強くあったので、本当に偶像を禁止してしまったら、そういう異教的なものに勝てません。結果的には両方とも西洋美術の中では非常に重要なものになっていくんですね。キリスト教的な図像の世界と古代地中海の異教の世界が合わさって西洋美術を形成していくわけですから。それなしには存在できない。

大西 よろしいでしょうか。ではもう一方、手を挙げていらした方に。

質問者B 今日、貴重なお話ありがとうございました。実はネットでこの問題を拝見して、神様の話だということを思ってきたんですね。そしたら神の話ではなくて宗教の話として話されて、もちろん関連されていると思うんですけども、神の問題と宗教の問題は観念的、因果関係的なものはあるかと思うか、本質的に違う話だと思うんですねと私は思いました。それで、ちょっとそのことを神のことについて伺いたいと思ってきたんですけどもね。もしその話でなければ、宗教の話としても伺いたいことは、宗教が、結局私が思うには、宗教の一番の根源は、私たちの人間の中に宗教心があるかないかというところから始まるように思うんですね。

プラス、それから私たちの中に生きているもの全ての中に神が存在しているものの全ての中に、神性、神の性質、神性のようなものがあると私は思うんですね。それが、それが何かとか、いいとか悪いとかということではなくて、そういう我々の中にそういう何か非常にやっぱり尊いものがあると思うんですよ。

それが余りにも問題にされないというか、ないがしろにする、問題にされない以上に、それを押さえつけてきたような気がするんですね。それは歴史的とか権力とかいろいろな意味で。そして近代になればなるほど、それがすごく狭い中に押し込められてきているように思うんですね。

だから、皆さんが元々の自分の中をよく見れば、我々はやっぱり宇宙と同じなんだと思うんです。でも、そのぐらいのやっぱりもっと自分の中を一人一人が大切にして、もっと尊いものだと思えば、そんなに私はこういう暗いというか、悲惨な状況ではないというふうに思うんですね。だから、それは、さっき先生がおっしゃった、偶像無くして信仰するするということは、きついとおっしゃったけれども、でも本質はそこにあると思うんですね。

そういうふうにそれを求めなければ、何々教という、そういういろいろなセクト、いろんなセクトに頼っていくというか、そういうことは私どこまでいっても、答えにはならないように思うんですけれども、それについてちょっとお伺いしたい。

島菌 今の話の中で、神様、神性というものを今多くの人はそれなりに求めているというふうにお感じになりますでしょうか。

質問者B スピリチュアル、ウェルネスそういうものへのやっぱりセンスはあると思います。だけど求め方が分からないと言うか、どこを見ていいのかわからないのか。結局、私たち世代の場合は、まだそういう世界に生まれて生きてきたけれども、テクノロジーに囲まれれば囲まれるほど、何かそういうものを見失っていつているんじゃないかなというような気がいたします。

島菌 どういうふうになれば、そういうものをもっと身近に求めることができる、そういうビジョンというか、どういうやり方がある、どういうところにそれが今あるというふうにお感じになりますか。

質問者B それはちょっと私、自分だけの考えでしか判らないんですけども、もっと基本的なこと、生活でも何でも。基本的なベーシックなことに還ると言うか、私が思うには、便利とか、全くわけのわからないことを進歩だとか発展だとかというふうに、本当にそうなのかなという。

もっと普通の生活で、普通の生き方でいいと思うんだけど、何かプロ

グラムされているものすごいものの中に、子供のときから乗せられて、知らない間にこういう世界に放り込まれるんです。それで苦しいが当たり前だと思うんですよね。自分のネイチャーというか、そもそもの人間というか。そもそもそんなことは必要ないんじゃないかということが多すぎると思います。

島菌 おっしゃることは大体そうだなというふうに思うわけですが、つまりそれは神様という言葉で考えていく、あるいは神性ということ考えていった方が、そういう今おっしゃったような本来人間が求めていくべき尊いものに近づいていくのが近道だというか、そういうふうになると思うんですけれども。それに対して宗教というと、これは天理教では、こうですよとか、キリスト教では、こうですよという横へ広げています。そういうふうにして寄り道をしているようなやり方ではそこへ行かないんじゃないかという、そういうお考えかなというふうに理解しました。

質問者B 既成のものというか、既成の権威とか、それから本に出ているようなこととか、そういうことにやはり頼り過ぎるといふか、そういうこと私は騙されているなと思うわけですよ。そんなことは人間がつくったものなので、たまたまそうなっているだけなので、別にそれが本当の真実でもないし、もっと自分自身の感性ですよ。どんな人でもいいから、自分を信じて、やはり自分、自分の目で見て、自分で息をして、そういうふうなところから出発しなければ、先生がこう言っているとか、あそこのあのお寺が立派なんだとか、この本にこう書いてあるとかということ以前に、何かもっとうちの中にある生命としての、あるじゃないですか直観とか。そういうものを手に入れないと、結局あだこうだと、子供は何か見失っていくような気がします。

島菌 今の社会ではそういうふうになりがちだと。おっしゃるとおりだと思います。なので、きょうの私の話でいうと、今、痛みの経験というふうなところで、そういう自分自身の中にある尊いものに出会うという、そういう経験、そういうふうな神樣的なもの、神様本来の尊いものに向かっていく、そういうのが今

私たちのあり方なので。そういう場というものを大事にしていくというか、そういう方向に今向かっているんじゃないでしょうかというお話でございましたので。私は、おっしゃることに余り反対ではなく、そのとおりだなと思いつつながら、ただ、それを以前だと、今おっしゃるようなことを内省的に自分で文章を書いたりとか、そういう形で近づいている、あるいはこれこそ本当だという指導者と向き合う、そういうことが近道だと考えられていたんだけれども、少し横向きになってきたんじゃないかなと。他者との交わりを通して自分が見えてくる。そういうふうに考えております。

大西 はい、ありがとうございました。そして、吉岡先生も何かおっしゃりたいことがありますか。

吉岡 僕は感覚的には、今おっしゃっている、人間性の内部に一種の神性というか、神的なものが宿っているというのは、もう最初から実感があるんですよ。けれども同時に、そういう直観は持ちつつ人の話を聞いたり、本を読んだり、作品を見たりするのが楽しい。

今の近代文明、現代文明に対する批判に関しては、すごく共感するところがあります。本来は誰でも、内的な神性の感覚を持っていたのに、今の科学技術モデルの社会の中にとると、それが分からなくなる。昔は人間の心や魂というのは神が創造した、非常に不可思議なわからないものだという理解だったのが、近代に入ると、心と言ってもそれは要するに意識であるとか思考であるとかいうことになって、さらに現代では意識ですらなくなって脳じゃないですか。そして脳は単なる情報処理マシーンであるという。これではどこにも神性が宿る場所がない。そんな人間理解に、現代の社会に住んでいるだけで、そういう理解に誘導されてしまうというのは、確かにおっしゃるとおりです。これは非常に苦しい状況であるというふうに思いました。

島菌 それからちょっとだけ。アートの話なんですよ。イスラムでもアートは非常に大事にしていますよね。つまりカリグラフィーとか幾何学模様、すば

らしいですね。というのは、神がつくった世界というのは、そういう驚くようなことに満ちているという感覚が、宗教とアートの接点の一面、偶像崇拜ということと、そういう神の創造した世界のすばらしさという両面がいろいろな形で現れてくるという、そういうことかなという。

大西 大変ありがとうございました。まだいろいろ質問したいこともあると思うんですけども、時間が参りましたので、これで終わりにしたいと思います。お二人の先生方に拍手をお願いしたいと思います。

ありがとうございました。(拍手)

2024年7月13日(土) 於：京都市立芸術大学 講義室12



12の対話実行委員会 (TWD)

2024